

飯山市埋蔵文化財調査報告 第75集

照丘遺跡 IV

TERUOKA

SITE



西より照丘遺跡を望む

2010・3

飯山市教育委員会

例言

- 1 本書は、平成 21（2009）年に実施した長野県飯山市照里字長峰ほか所在する照丘遺跡の調査報告書である。
- 2 発掘調査は、市道敷設に伴い平成 21 年 6 月 11 日より同年 6 月 23 日まで飯山市教育委員会が実施した。
- 3 調査体制は以下のとおりである。

土屋 稔	飯山市教育長
村山 芳広	飯山市教育次長
中原 美恵子	飯山市教育委員会学習支援課長
望月 静雄	同 学習支援課長補佐（兼）文化振興係長
中村 徹	同 学習支援課文化振興係主査（～平成 21 年 11 月 30 日）

調査担当者 望月 静雄（学芸員）
作業参加者（順不同・敬称略）

小田切忠志・久保田具次・足立栄一・上原節夫・武井昭浩・高橋浩一

協力者・機関（順不同・敬称略）

小笹喜久夫（地権者）・足立栄一（地権者）・上原三千雄（地権者）
飯山市役所道路河川課
- 5 図面等の整理ならびに報告書の執筆は、調査担当の望月が執筆したが、遺物・遺構実測、トレースは飯山市ふるさと館職員藤沢和枝、山本伊都子が行った。
- 6 調査の出土遺物・調査図面等は飯山市ふるさと館で保管している。

目次

例言

I 遺跡の位置と環境	1
1 地理的環境	1
2 歴史的環境	3
II 照丘遺跡調査の目的と経緯	5
1 調査の目的	5
2 経緯	5
III 遺跡の概要	7
1 遺跡の概要と過去の調査	7
2 照里古墳群	9
IV 調査	12
1 調査の概要	12
2 発見された遺構	15
3 遺物	16
V 結語	17

I 遺跡の位置と環境

1 地理的環境（キーワード：飯山盆地・長峰丘陵）

照丘遺跡は長峰丘陵の北端部、飯山市大字照里字長峰 2066 番地ほかに所在する。

遺跡は西の外様平、東の常盤平の低湿地に挟まれ、外様平から流れ来る広井川と、北部から流れ来る今井川が千曲川に合流する地点にある。日本一の大河千曲川が、長野県に残す最後の平地が飯山盆地である。この飯山盆地には西に関田山脈、東は三国山脈系山地、南は高社山に囲まれた小盆地である。盆地は南の飯山市大字蓮から北の大字常郷までの、南北のおよそ 15km、東西の幅は最も広いところでおよそ 6km である。長野県内の盆地の中でも小さな盆地の一つである。この盆地内にはいくつかの丘陵と平坦地が発達し、中央部を千曲川が北流している。平坦地は千曲川やその支流が形成した沖積平野であり、川の東側を木島平と呼び、西側は長峰丘陵を介在させて東側を常盤平、西側を外様平と呼称している。

長峰丘陵は飯山盆地の中央部をほぼ南北に走る丘陵である。飯山市街地北の有尾から常盤地区戸狩にかけて細長く分布し、南北およそ 7km、東西の幅は最も広いところで 1.2km であり、標高は最高値 416m で、盆地底からの比高差は約 100m である。丘陵の東麓線は極めて直線的に延び、丘陵の斜面も急傾斜を示している。これに対して、西側は比較的曲線的であり、斜面も緩い傾斜を見せている。丘陵の北端は戸狩地籍で消滅する。

外様平は、南は柳原地区藤ノ木から始まり、北の常郷地区大深にかけて、南北約 9km、幅約 1.5km の細長い低地である。盆地西側の山沿いには、小規模な扇状地が連続しており、南から皿川扇状地、笹川扇状地、滝沢川扇状地などが隣接し合って、複合扇状地を形成している。南部の藤ノ木や南条での標高は約 315m で、比較的起伏に富んでおり、扇状地の発達と合わせて小規模な丘陵地形が認められる。これに対し、北部の小泉や戸狩では平坦となり、その標高は約 315m で、戸狩の最も低いところでは 312m となっている。これより北へ行くと標高は次第に増して曾根では 450m となる。中央部の滝沢川扇状地は、西部山地黒岩山に源を発して中条地区を流れ下る滝沢川はそこで藤ノ木から北流してきた広井川と合流してさらに北へ流れ、尾崎・小泉沖を流れて戸狩地籍で千曲川に合流する。また、北部では今井川が南に流れて同じく戸狩で千曲川に合流する。

常盤平は長峰丘陵と千曲川とに挟まれた平坦地であり、千曲川の氾濫堆積物によって形成された沖積平野である。常盤平の西縁は長峰丘陵の東縁となり、ここを県道号線が走っている。長峰丘陵の南端から北端までがその長さであり、千曲川に挟まれたこの低湿地は、常に千曲川の水害を受けてきた地域である。千曲川の左岸沿いの小沼から柳新田にかけての地域は、周りより数メートル僅かに高く、自然堤防となっている。また、北東部にあたる大倉崎から上野にかけての地域は、平らに比べて 7～9m 程標高が高く自然堤防ではない。この常盤平も戸狩地籍で狭まり消滅する。

遺跡は、長峰丘陵の北端に位置する。旧長野県飯山照丘高校敷地から南側の飯山市立第三中学校敷地がその中心と思われる。丘陵東側は比較的急傾斜で常盤平に接しているが、西側斜面は比較的緩やかである。今回の調査は、丘頂の旧飯山照丘高校及び第三中学校敷地から西側の外様平に面する緩斜面に位置する地区であり、これまで調査はなされたことはないが、付近の畑から土器や石鏃などの遺物が採集されていた。

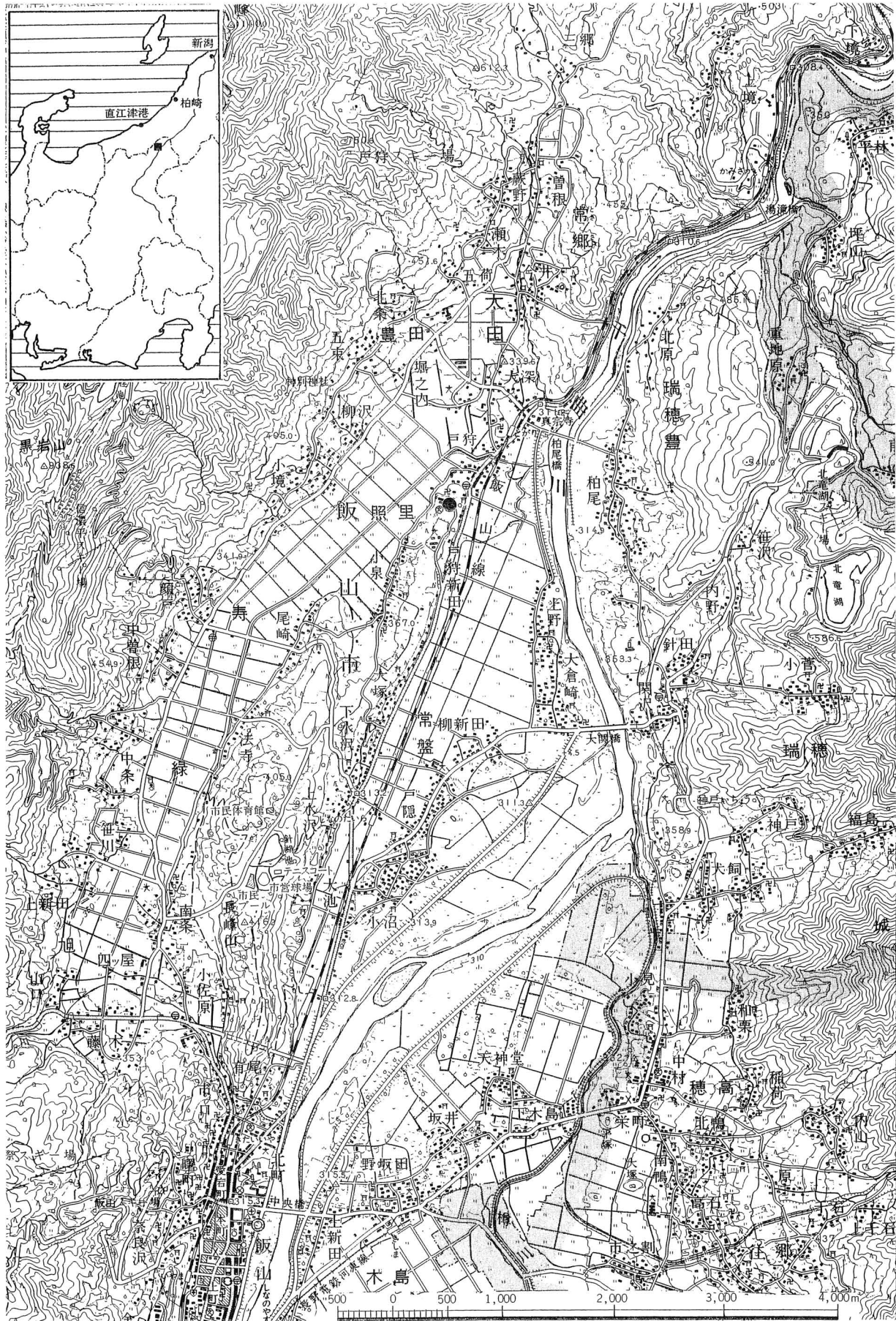


図1 遺跡の位置 (1:50,000)

2 歴史的環境 (キーワード:弥生時代遺跡の密集地帯)

旧県立飯山照丘高校の前身は、昭和 23 年県立下水内郡高等女学校が、新制高等学校に昇格して長野県下水内郡飯山南高等学校と改称して定時制課程を設置したことに始まる。外様・太田・永田・常盤・豊井の各分校が設置されたが、昭和 36 年には常盤・外様・太田分校が統合されて、照里地籍に照岡分校が設置された。この後改築や造成に伴って多くの工事が実施されるとともに、昭和 49 年には南高から独立して長野県飯山照岡高校となった。さらに、昭和 53 年からは新校舎の建設が開始され、照里地籍の景観も一変することとなったが、平成 19 年 3 月に生徒数の減少に伴う統合により閉校となった。

この学校敷地内に埋蔵文化財が所在することは古くから知られていたが、学術的に論じられたのは、昭和 36 年に統合分校に伴う工事によって出土した遺物を報告した高橋桂氏が最初であった。また、昭和 52 年には新校舎建設に伴って照丘高校による発掘調査が実施されている。こうした一連の工事などにより、敷地内の遺跡は大半がほぼ壊滅したと考えられている。

一方、南接する飯山市立第三中学校は、昭和 42 年 4 月 1 日に、太田・常盤・外様・岡山の各中学校が統合し、飯山市立第三中学校として発足した。同年 5 月からの工事により、古墳の周溝と推定される遺構を確認した。このことについては後述するが、北側の照丘高校敷地とは隣接しており、遺跡内容については同一遺跡といえるかどうか不明であるが、一帯を「照丘遺跡」として範囲を指定している。本項では長峰丘陵を中心に、照丘遺跡周辺の遺跡を時代別に触れていくこととする。

旧石器時代 飯山市は旧石器時代遺跡の宝庫である。千曲川の河岸段丘面上には太子林・関沢・日焼等の遺跡が十数か所密集し、県内ひいては全国的にも有数の旧石器時代遺跡群を形成している。千曲川河岸のほか長峰丘陵上にもいくつかの該期の遺跡の存在が明らかとなってきた。丘陵南側から仮称長峰、針湖池、小泉、尾崎南、大塚などの遺跡であり、ナイフ形石器や彫器などが発見されている。

縄文時代 長峰丘陵南端の佐原遺跡は、昭和 44 年(1969)年に発掘され表裏縄文土器が多量に出土し、草創期から早期にかけての遺跡として、近年再びこの遺跡が研究者の間で注目されている。やはり長峰丘陵南端にある有尾遺跡は、有尾式土器の標式遺跡である。以降、長峰丘陵において、縄文時代中期から晩期にかけての遺跡はほとんど認められない。周辺の山麓には認められることからすれば、この時期、長峰丘陵は居住空間としてはそれほど活用されなかったようである。ただし、針湖池遺跡では、いわゆる T ピットと呼称される遺構が数多く発見されており、畀猟を行っていたと類推される遺跡も存在している。

弥生時代 長峰丘陵と外様平の西縁扇状地は弥生時代遺跡の密集地である。把握している遺跡だけで 40 か所を越えている。中期は中野市栗林遺跡を標識とする栗林式土器が出土しており、後期は長野市箱清水遺跡を標識とする箱清水式土器を出土し、当地が北信地方一体の土器文化圏に含まれていることがわかる。代表的な遺跡として小泉遺跡がある。工場団地造成に伴う昭和 63 年(1988)年～平成 3(1991)年にわたる発掘調査で百棟を越える住居址が検出され、碧玉製玉類を出土する組み合わせ式木棺墓が多数検出されている。弥生時代の稲作が冬期の多雪を障害としなかったことを物語っている。

古墳時代 古墳時代の集落跡は発見例が少ない。その中で柳町遺跡は前期の遺跡として貴重である。竪穴住居址が検出され、北陸地方と強い類縁性のある土器が出土している。上野遺跡でも前期の竪穴住居址と方形周溝墓が検出され、竪穴住居の構造・出土土器ともに北陸地方に強い類縁性をもつ。古墳は長峰丘陵上に点々と存在する。かつては 20 基以上を数えたが、今は当遺跡東北の照里 8 号墳をはじめ 8 基が確認できる。大塚茶臼山古墳は直径 30m を越える市内最大の円墳である。



- 1 柳沢A(縄・古) 2 柳沢B(弥) 3 鶴屋敷(弥) 4 桜沢(平) 5 小境(弥・平) 6 押出(弥・古) 7 顔戸館(中)
 8 顔戸第5(縄) 9 顔戸大天狗(弥) 10 北木ノ下(弥) 11 顔戸南木ノ下(縄・弥) 12 顔戸道下(縄)
 13 釜淵(縄・弥) 14 布施田神社(平) 15 笹川(縄) 16 真宗寺裏(先・縄・弥・平) 17 岡峰(縄・弥・平)
 18 旧照丘小学校(弥) 19 光明寺前(弥) 20 照丘(弥・古) 21 照里古墳群 22 茶白山古墳群 23 大塚(先・弥・平・中・近)
 24 大塚古墳群 25 尾崎館(中) 26 小泉(弥) 27 柳町(弥・古) 28 山崎(弥) 29 尾崎南(先・弥)
 30 東長峰(弥) 31 西長峰(弥) 32 下林(弥) 33 法寺(弥) 34 水沢(弥) 35 下水沢(平) 36 針尾池(先・縄・弥・平)
 37 北原(縄・弥・平) 38 東源寺(先・平) 39 お茶屋(縄・弥) 40 大池古墳群 41 上野II(平)
 42 上野(先・縄・弥・平) 43 大倉崎館(中) 44 上野古墳 45 大倉崎(先・縄)

図2 照丘遺跡周辺の遺跡(1:25,000)

また、第三中学校建設造成時に直径 25m の古墳周溝跡が検出、調査されており、和泉式期の高塚などが出土している。長峰丘陵上では今のところ確実に横穴式石室をもつ古墳はない。

照里 8 号墳は今回測量調査を実施した。その結、果直径ないし一辺が 18m を測る円墳ないし方墳であり、高さ 2.8m を測ることが判明した。

平安時代 飛鳥・奈良時代の遺跡は今のところ発見されていない。再びこの地に開発の鍬が入るのは平安時代になってからになる。実年代でいえば 9 世紀後半から 10 世紀にかけて当地に多くの「農村」が開拓されたことが、外様平を中心とする当該期の遺跡によって推察することができる。代表的な遺跡として北原・鍛冶田遺跡を中心とする旭町遺跡群があげられる。北原遺跡では鍛冶遺構が多く検出され、「常岩の牧」との関係が指摘されている。また北隣の岡峰遺跡でも竪穴住居址が検出されている。

中世 中世は現在の集落が成立しはじめた時代であり、また争乱の時代でもあつて、関田山脈東麓の峰々に点々と山城が築かれた時代でもある。代表的な遺跡としてこれら山城のほか釜淵遺跡などがある。釜淵遺跡では全国的にも珍しい鳥形木製品をはじめ、永仁 4(1296)年銘の木簡、能登半島で焼かれた珠洲焼などが出土している。文献もとぼしい中世常岩の牧の具体的様相もしだいに明らかになってきている。

Ⅱ 照丘遺跡発掘調査の目的と経緯

1 調査の目的 (キーワード:統合中学・通学路新設)

飯山市は、中学生徒の減少から第一から第三までの三校の中学校を城北、城南の二校とすることを決定し、平成 22 年 4 月に開校することとなった。

このうち城北中学校については、長野県飯山照丘高校校舎を使用することとし県から譲り受けた。旧飯山照丘高校は第三中学校の北に隣接しているが、第三中学校校区より広範囲の通学区になることから、新たな通学道路が必要となった。この敷設場所は、旧飯山照丘高校、第三中学校敷地を含めて「照丘遺跡」として知られている場所であることから、市教育委員会では事前の発掘調査を実施することになった。

2 経緯

調査は、教育委員会学習支援課文化振興係が担当した。道路新設のため、土地買収後に調査するのが一般であるが、期間が限られていたこともあり、同意をいただいて調査を実施することとなった。以下に調査日誌抄録を掲げる。

平成 21 年 6 月 11 日 (木) 天候 雨のち曇り

0.25 バックホーにより表土除去。作物が栽培されているところは対象外とした。遺物等は見当たらず、一部に攪乱の痕跡が認められた。

6 月 12 日 (金) 天候 晴れ

トランシットを用いてグリットを設定する。杭 N o 1 から BC1 を見通して X 軸、90 度振って Y 軸を設定した。間隔は 5m とし西～東へ 1 から、南から北へ A からとした。

6 月 15 日 (月) 天候 晴れ

E-9・D-9 から着手する。E-9 区西側に攪乱あり、中部土地改良区の用水暗渠と思われる。D

ー9区において溝状遺構及びピット2箇所確認。やはり下段に攪乱あり。B・Cー9区へそのまま精査を行う。下段に攪乱以外遺構を認めず。

溝状遺構・・・SD1として掘り下げ、溝内から陶器1点出土。中世と思われる。

柱穴・・・D9P1、P2とする。P1は深さ約30cm、P2は皿状。

6月16日(火) 天候 晴れのち雨

G・H-8区着手。中部土地改良区暗渠用水のため攪乱続く。午後B～F-7区着手。C-7区及びE-7区にピット様落ち込み確認。平板実測にて、全体図北半作図。テント付近に仮BM320,000m設置。

6月17日(水) 天候 晴れ

北側テント前着手、前面攪乱か、褐色土が硬い。

6月19日(金) 天候 晴れ

SD1の東(上)側への続きを調査するため、東上段を拡張。表土からスコップにて掘り下げ。黄褐色土まで約90cmと深かった。SD1は、崖面付近にて終了するか、ないしは直角に南側に曲がるよう。残土置き場としたため判断がつかず、月曜日にバックホーを入れて確認することとする。写真撮影等済。午後未着手のD～H-8・9ラインの精査に入る。

6月22日(月) 天候 曇りのち雨

午前中バックホー入る。6・7ラインに入る。

6月23日(火) 天候 曇りのち雨

SD1拡張区精査、写真撮影、掘り下げ、完了写真撮影。全体図等測量及びレベル作業。現地調査がすべて完了し、機材の撤収を行った。



写真1 溝状遺構の調査



写真2 調査地区と西に広がる外様平

Ⅲ 遺跡の概要

1 遺跡の概要と過去の調査（キーワード:学史に登場する照丘遺跡）

照丘遺跡は長峰丘陵の北端、飯山市第三中学校敷地内と旧長野県飯山照丘高等学校敷地内に存在する遺跡の総称である。遺跡の主体的年代は弥生時代と古墳時代である。北接して光明寺前遺跡があるが照丘遺跡と内容が等しく両者は一連の遺跡と考えられる。

現在遺跡地は両校造成工事によって大きく改変されているが、その工事に伴って、時には造成工事のブルドーザーが動く中で発掘調査が行なわれている。

昭和 37(1962)年の調査 昭和 36 年 4 月 1 日をもって飯山南高校定時制分校が統合されることとなり、その位置が現在の照丘高校の地に決定、昭和 35 年より校舎建設工事が始まった。

翌 37 年 4 月より第 2 次工事としてグランド整地工事が始まった。その時、同年 4 月より同校に赴任した高橋桂が弥生時代の遺物が出土しているのを発見、飯山北高校地歴部や飯山南高校郷土研究クラブの応援をうけてブルドーザーによる作業の暇をみて遺物の採集につとめた。出土遺物には土器と共に木製品 3 点があった。

8 月には第 3 次工事として工業科校舎敷地の整地作業が行なわれたが、それに先だって夏季休暇中の三日間ではあったが、消滅してゆく遺跡の一端でも確認しようと、神田五六、桐原健両氏と、高橋桂が中心となり、飯山北・南両高校の地歴部・郷土研究クラブ員の応援のもと A 地点に試掘溝を設けて調査するとともに 4 月以来採集された遺物の整理を行った。

A・B 両地点から出土した土器は弥生時代中期後半のもので、栗林式でも後出的様相をもつもの

である。石器はB地点から石槌や、擦り切り手法で製作されたいわゆる栗林式磨製石斧と呼ばれている片刃の小型磨製石斧などが4点出土している。他に土製紡錘車が1点ある。

この発掘によって照丘遺跡が弥生時代の集落跡であることがはっきりしたと同時に、工事中という悪条件でありながら情熱をもって調査されたことに対して深く敬意を表したい。弥生時代の建築用材の出土はこれ以降飯山市内ではみられないのである。

翌38年夏には現グラウンド東北隅付近で貯蔵穴が発見されている。

昭和42(1967)年の調査 昭和42年4月1日をもって太田・常盤・外様・岡山の4地点の中学校が統合して飯山第三中学校として発足した。その建設用地として現在の地が選定され、5月からブルドーザーによる地均し工事が開始された。その際ここは弥生時代の遺跡地であり工事に際しては十分な注意をするようにと教育委員会に対して高橋桂が要望していた。そして折をみては飯山南高校照丘分校の考古学クラブ員と現場を見てまわったのである。そして7月中旬に至り地均し工事によって露呈したローム層内に点々と認められる黒色土中から土器が出土していることをクラブ員が発見、高橋に報じたのである。8月16日、夏休みで帰省していた国学院大学生木村幾太郎、宮崎博両氏、秋津の松沢芳宏氏とともに遺跡を調査、大規模な環状周溝遺構であることを確認、直ちに工事の延期と調査の必要性を教育委員会へ申し出て19・20日の両日にわたって国学院大学永峯光一氏の指導のもと発掘調査が行われたのである。

発掘地点は現第三中学校体育館付近であり、西へ開く沢に挟まれた小舌状台地の頂点にあたり、東は常盤平と千曲川、西は外様平を一望することができる。

検出された周溝は、南側がすでに破壊されていたものの北側は表土が削平されただけの状態が残されていた。周溝の直径は外周で約26m、内周で約20mを測る。内壁はゆるい傾斜で溝底に接する少し浮いた状態で土師器が部分的に集中して配置されたかのような状態で出土している。

出土した土師器は高坏17、壺1、埴2、坏4であり、和泉式の新しい時期におかれるものである。あえて実年代を示せば、古式須恵器が共伴し始める頃すなわち5世紀後半代といえようか。

この周溝の性格については報文では「古墳の系譜を引く埋葬形式」と慎重な記述をされているが、調査した高橋桂も今では古墳の周濠と考えている。なおこの古墳周濠については本報告で照里9号墳と命名した。

またこのような周溝が本例だけでなく、ブルドーザーによる削平箇所を丹念に調査したところ他に2~3か所存在したと報告されている。

この発掘で古墳の周濠が検出された意義は大きい。周溝内への土器共献(あるいは土器を用いた祭祀)という方形周溝墓的要素をもち、葺石・埴輪という古墳的要素をもたないという特色は当地の古墳の特性をうかがう良好な資料となった。長峰丘陵北縁部には、第三中学校の南に照里1号墳(円墳、径18.0m、高2.8m)が、照丘高校東北に照里8号墳(円ないし方、径18m、高2.8m)があり本古墳はその中間地にあたる。他にも2~3か所同列があるとすれば当地は同規模の円墳からなる古墳群と考えることができる。その年代も当例から、5世紀後半には築造がすでに開始されていたと考えられよう。またすでに削平され地表に痕跡をとどめない所でも古墳の痕跡が見つかる場合があることを実証したこととなった。

昭和52(1977)年の調査 昭和52年飯山照丘高校校舎改築に伴って、同校が調査主体(宮林秋男校長)となって実施された。調査は同校教諭であり日本考古学協会員の小林幹男教諭が担当し、児玉卓文・吉岡智雄・関和行同校教諭の指導のもと同校考古学クラブ員によって、7月16日から7月30日までは夏季休業を利用し、以降10月8日までは土曜日、日曜日を利用して実施された。

調査地点は敷地内南端のゆるやかに西に傾斜する所で、約500㎡を発掘した。

検出された遺構は弥生時代後期の竪穴住居址4、円形の溝を伴う特殊遺構1、溝状土坑3である。

竪穴住居址はいずれも隅丸方形ないし隅丸長方形プランで、1・2号が重複し、3・4号が重複している。規模は1号が長径2m、短径1.2m、2号が推定で1号と同規模、3号が長径2.15m、短径1.9m、4号が長径3.2m、短径2.0mでありいずれも小形である。

この発掘調査は高校が主体となり、同校教諭・考古学クラブ員の手で行われたことに意義がある。また、調査後竪穴住居が学校敷地内に生徒の手で復元され、冬期における室内の保温効果や雪による建築材の破損状況などが観測され報告されていることも特記される。

2 照里古墳群（キーワード:8基・円形周溝）

今回、調査地に東接する照里8号墳の測量調査を実施した。また照里古墳群についての記述が報文によって不統一なのでここで整理しておく。

照里古墳群

『村史ときわ』では「常盤には、「信濃史料」第一巻上(考古資料編)によると、現存する古墳はわずかに次の三基だけのことである。すなわち、照里一号墳(円墳)、照里二号墳(円墳)、大塚古墳(円墳)の三つである。

しかし、踏査の結果では、このほかに長峰丘陵全体で十七基の古墳があり、そのうち、大塚以北だけでも、大木氏山林中に三基、高橋氏山林中に一基が存在している。これらはいずれも墳高一メートル内外、墳径も五～六メートルという小規模な円墳で、ボーリングの結果では無石廓式のものである。

大塚古墳は数十年前に盗掘され、照里二号墳は畠にならされてしまつて原形を留めず、ともに現在は資料価値に乏しい。ただし、数年前に寿区尾崎から出土したという直刀があり、また大塚のある農家の収蔵している瑪瑙の勾玉などから、長峰丘陵上に築造された古墳は、いずれも後期後半のものであることがわかったのである。(桐原健「常盤のあけぼの」『村史ときわ』1968 27・28ページ)とあり、照里2号墳はすでに畠にならされたと記されている。

『遺跡分布調査報告Ⅰ』では、種別・範囲・規模・現況の欄で「1号墳が径18.5m、高さ2.8m、2号墳が径16.7m、高さ2.2m、3～7号墳が径6～8m、高さ1～2m、8号墳が径15m、高さ3m」と記され、遺構・遺物の欄で「下水内郡誌によると北端の古墳で嘉永年間に直刀・鎧冑の類が出土している」と記され、位置、地形の欄で「『下水内誌』によると戸狩地籍の古墳は総計17基とあるが、現在確認できるものは8基にすぎず、従来からの1号墳・2号墳及び飯山第三中学校南側の山林中の5基連続するものを北から3・4・5・6・7とし、照丘高校の北東山林中のものを8号墳とする。

「照里遺跡」において検出されている円形周溝は本古墳中の周溝のみの確認と考えるのが妥当と思われる。地籍範囲としては「照里遺跡」とほぼ重なる。」(長野県飯山北高等学校地歴部OB会『遺跡分布調査報告』Ⅰ 1977 36ページ)と記されており、照丘高校東北山林中のものを8号墳としている。

『飯山の遺跡』では1号墳から7号墳までを『遺跡分布調査報告Ⅰ』に準じ、昭和42年の調査で検出された円形周溝遺構を8号墳としている。(『飯山の遺跡』飯山市教育委員会 1986 47ページ)。



図3 照丘遺跡と照里古墳群 (1:5,000)

ここでは基本的には『遺跡分布調査報告Ⅰ』にしたがい、第三中学校から小泉へ下る道の南に現存するものを1号墳、畠にならされて現存確認できないものを2号墳、照丘高校東北山林中に現存するものを8号墳、昭和42年の調査で検出された円形周溝遺構を9号墳として整理する(図3)。第三中学校南の丘頂に南北に並ぶ3~7号墳は規模が小さく古墳とすべきか迷うところだが、便宜上照里古墳群に含めておく。『村史ときわ』に記される大木氏山林中の3基、高橋氏山林中の1基は大塚古墳群に含まれるものであるが、形態・立地ともに照里3~7号墳に似ている。

古墳群の築造年代については『村史ときわ』の中で桐原氏が後期後半のものとされているが、9号墳出土の土器は和泉期のもので中期後半にさかのぼる。むしろ横穴式石室墳でないことを積極的に評価すれば、中期から後期初頭に築造の中心があると考えている。

照里8号墳 照丘高校東北に位置する。長峰丘陵は西斜面はなだらかであるが東斜面は急崖である。8号墳は長峰丘陵頂部平坦面の東端にあって、少し東へ張り出した小尾根の先端に築かれている。古墳の西は第三中学校・照丘高校への通学路で切通しとなっているが、かつては丘頂と一連の平坦面であった。

古墳の現況は山林で、杉の植林となっている。古墳西には墓地があり、墓地に東接して幹囲250cm程のケヤキがある。墳頂からケヤキにかけて盗掘と思われる4m×2m程の穴がある。『下水内郡誌』による北端の古墳がこの8号墳を指すのであれば、嘉永年間に直刀・鎧織の類が出土したという穴かもしれない。穴には石等は見当たらず、主体部は石室等でないことの一傍証となろう。

墳形は、等高線をみると北および南斜面は円を描くが、東斜面は直線的である。測量図からは方墳の感が強いが、今のところ方墳か円墳か決めかねる。

古墳の西南(墓地の南)は少しくぼんでおり、丘陵高所側に掘り割り等の施設があるものと考えられる。

規模は、西の墳裾を墓地南のくぼ地から判断して墓石の西に求め、他は墳裾が比較的明瞭なのでそこに求めると、東西18m、南北18mとなる。高さは丘陵高所の西側で約1.5m、東側で約2.8mである。墳丘東には幅約7mの平坦面があって、墳丘の量観を際立たせている。墳頂平坦面は西側がやや変形し明瞭ではないが、およそ東西、南北とも9m程で墳丘全長の約2分の1である。

葺き石、埴輪などの外部施設は表面観察からは不明である。

参考引用文献

高橋桂「飯山市照丘遺跡出土の弥生式遺物について」『信濃』14-11 1962

高橋桂「飯山市照里環状周溝調査略報」『信濃』20-4 1968

小林幹男・児玉卓文ほか『飯山照丘高等学校敷地内遺跡発掘調査報告書』

長野県飯山照丘高等学校 1978

IV 調査

1 調査の概要

(キーワード 溝址の確認)

対象地区は、旧照丘高校と第三中学校の建つ丘頂部から西側の外様平に至る西斜面で、小泉集落北市道から旧照丘高校と第三中学校グラウンドの境界付近に北上していくルートである。仔細に観察すると、緩やかな台地状の地区や谷状地形の箇所も存在している。

本工事は平成20年より具体化した、ルートの決定は平成20年秋にずれ込んだため土地所有者が作付け計画された後のために、平成21年度の春時点ではすでに作物が作られている箇所がいくつかあった。そのため、発掘調査は作付けされている箇所を除外して調査可能な部分のみ実施することとした。

調査箇所は、地形上や削土面積の大きな点からも取り付け口の付近を中心として実施することとした。ただし、作物が栽培されていたため、グリットを設定したもののトレンチ状に調査を実施した。調査可能な区域では、下水内中部土地改良区の用水暗渠が埋められており、そのためかなりの部分において破壊されていた。また、北側の道路敷設区域ではないものの約5m削土する区域では、すでには確認できなかった。

遺構は、溝状の遺構が一基及び数地点でピットが確認されたが、その性格等については不明である。

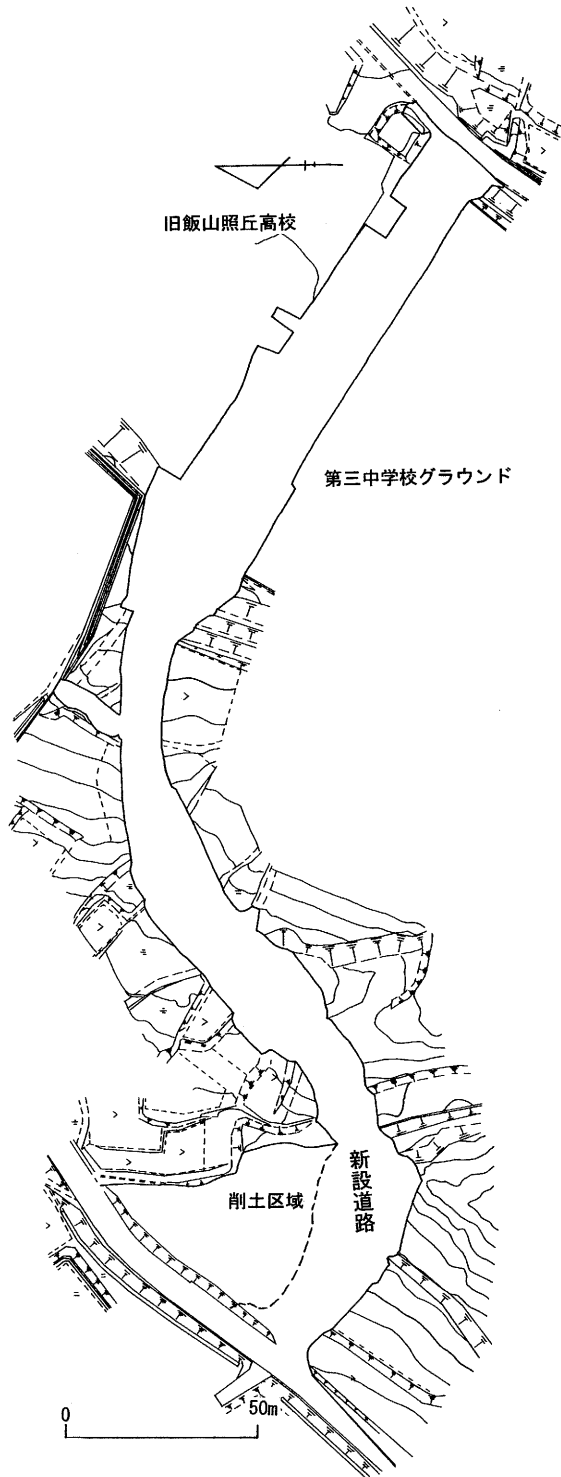


図4 調査地区地形図(1:2000)



写真3 作物部分を残しての発掘調査



写真4 J~N-4・5地区の発掘調査状況

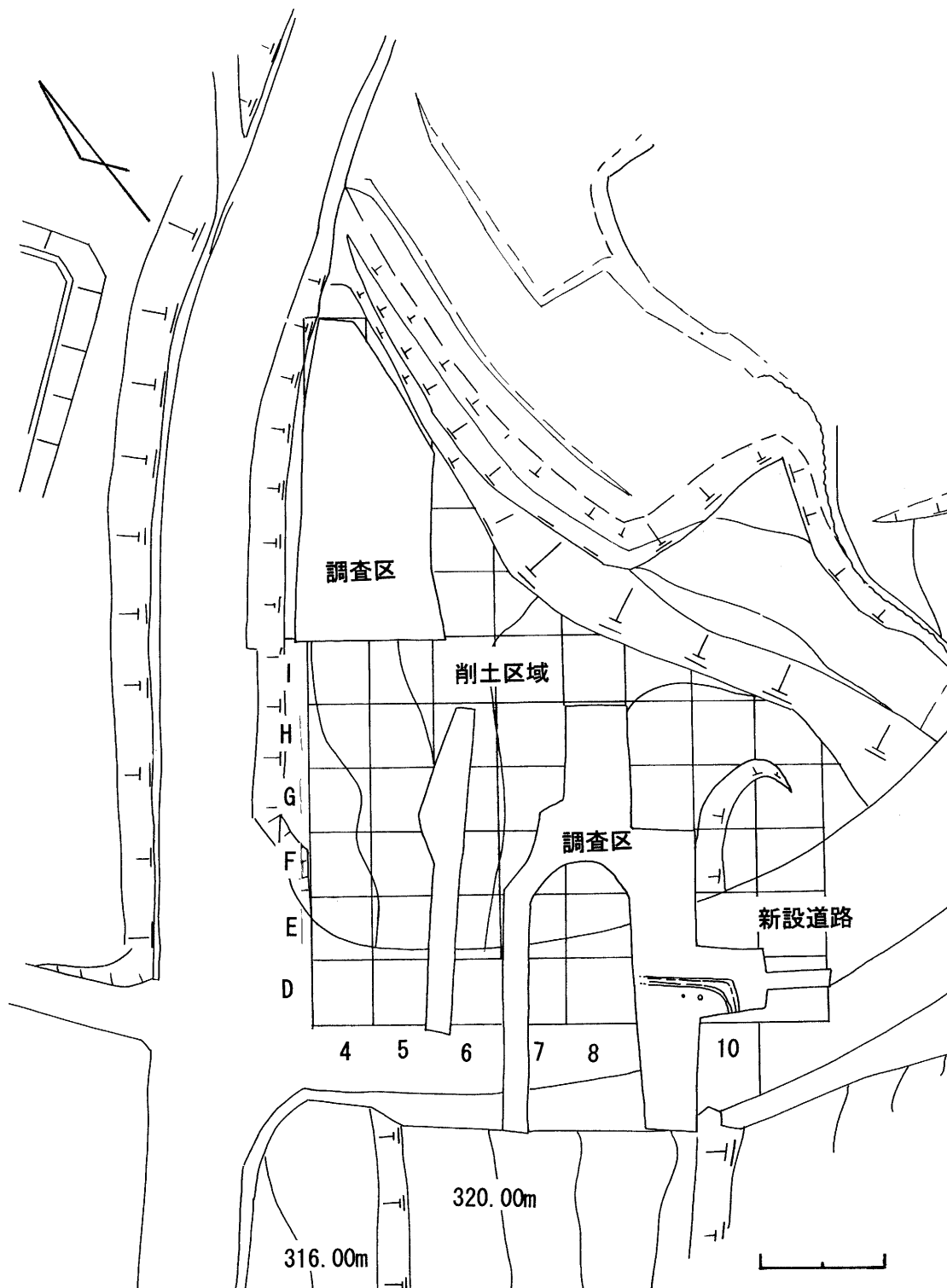


図5 調査区設定並びに調査全体図(1:500)

2 発見された遺構 (キーワード:溝・ピット)

(1) 溝状遺構(SD1)

D-9・10 区において発見された溝状の遺構である。L字形を呈しており、確認部分では全長9.8m 幅40~100 cm、深さ9~18cmを測る。西側は暗渠用水工事のため不明となっている。居宅の周溝とも考えられたが、全体を調査することができなかつたため判然としない。

溝内から1点の陶器が発見されている。



写真5 溝址及びピット全景



写真6 溝址内陶器出土



写真7 陶器出土状況

(2) ピット(P)

調査区内において、5基のピットを確認した。遺構であるのか判然としないものが多いため、本項では明らかなものについてのみ報告する。

P1・P2 溝状遺構の内側で発見された2基のピットである。P1は径32cm、深さ31.5cmを測る。P2は径24×36cm、深さは10cmと浅い。2基のみであり、建物になるかどうかは不明である。ただし、溝址とほぼ並行する点は、建物址とそれを取り巻く雨落ち溝と考えても良いのかもしれない。

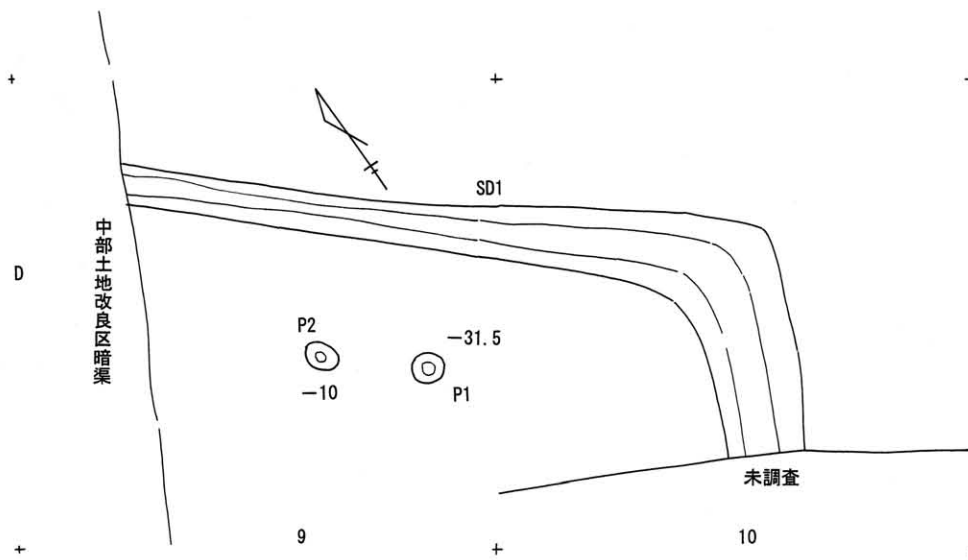


図6 溝状遺構(SD1)とピット(P1・P2) (1:80)

3 遺物 (キーワード: 中世・陶器)

発見された遺物は、溝状遺構から発見された灰釉陶器碗片1点のみである(写真8・図5)。

灰緑色の釉薬がかかり、貫入が認められる。瀬戸・美濃陶器と思われ、年代は15世紀代と考えられる。



写真8 陶器

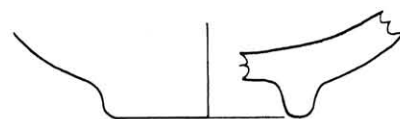


図7 陶器実測図(1:2)

IV 結 語

今回の調査は、照丘遺跡中心部がどの範囲まで延びているか、という遺跡の範囲を研究する上で興味深い地区であった。これまで、旧照丘高校敷地を中心として弥生時代の集落跡が確認されていた。生産地を外様平に求めるならば、今回の調査地区にも当然集落の範囲が及ぶものと推定された。しかしながら、ほとんど痕跡が認められなかったことを考慮すれば、集落外であったこととなり、生産地との間の空白地帯であったか、もしくは生産地が集落西側の外様平ではなく本地区はそうした活動エリアではなかった可能性がある。

旧飯山照丘高校の北側には光明寺前遺跡があり、同時代の遺跡でもあることから一帯が同一の集落跡であったと推定されている。そうであれば、旧照丘高校北側の谷状地から低湿地にいたる区域が生産地であった可能性が高く、本遺跡の範囲は旧照丘高校敷地から光明寺、及び北側の広井川にかけての一帯が、弥生時代中期から後期にかけての集落址であったと考えておきたい。

今回の調査では遺構・遺物とも僅かではあったが、照丘遺跡の範囲を含めて今後の研究にとっては大きな成果があった。今後とも調査・研究を進めていきたい。

最後に、本調査にご協力をいただいた小泉区長様をはじめとして地権者の皆様、発掘調査に参加いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

報告書抄録

ふりがな	てるおかいせき よん							
書名	照丘遺跡 IV							
副書名								
巻次								
シリーズ名	飯山市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第 75 集							
編著者名	望月静雄							
編集機関	飯山市教育委員会							
所在地	〒389-2292 長野県飯山市飯山 1110-1 TEL0269(62)3111							
発行年月日	平成 14 年 3 月 22 日							
ふりがな 所有遺跡 名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ' / ''	東経 ° / ' / ''	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
照里遺跡	いひやまし 飯山市 おおあざてるさと 大字照里 727 ほんちほか 番地他	20213	81	36° 54' 37"	138° 23' 06"	20090611 ～ 20090622	545 m ²	市道建設 に伴う緊急発掘調査
所有遺跡 名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
照里遺跡 IV		中世	溝址・ピット	陶器				

飯山市埋蔵文化財報告 第75集

照 丘 遺 跡 IV

平成22年3月31日 発行

編集 飯山市教育委員会 学習支援課 文化振興係

発行 飯山市教育委員会 長野県飯山市大字飯山 1110-1

印刷 (有) 足立印刷所 飯山市大字常郷 581-1